

# 多様なコンテキストにおける文学的教材利用の意義

## 実践者の信念の分析から

久世恭子

### 1. はじめに

言語教育において文学テキストを使う意義は、教育的文体論の研究成果などを基に 1980 年前後から英米を中心に主張されてきた。その意義は、言語、感情や人間形成、文化に関するものなどに大別される (e.g. Carter & Long, 1991)。一方、日本の大学英語教育において文学作品やそれに関連した教材が使われる機会は限定的で、「文学を専門とする教員」による「文学を専攻する学生」のための英語授業である場合が多い。文学教材減少の理由としては、実用的コミュニケーションや TOEIC など試験対策の重視、文学と言語分野の隔たりなどと共に、学生の専攻や将来のキャリアに直結する特定の英語 ESP (English for specific purposes) への関心が指摘されている。これらの状況を踏まえ、ESP 中心の授業など従来文学的教材は使いにくいとされてきた多様なコンテキストにおける利用の可能性を、実践者の信念という視点から議論するのが本研究の目的である。

### 2. 研究の背景

まず、英語教育における文学と ESP の関係を整理しておきたい。歴史的に文学と ESP にはほとんど接点がなく、むしろ相反するものと見なされてきた (e.g. Hirvela, 1990)。しかしながら、conformity, creativity などの観点から ESP をバリエーションのあるものと見なす Widdowson (1983) の理論に注目すると ESP を広義に捉え直すことが可能となり、そこには文学教材の役割も見出すことができる (Hirvela, 1990)。実際に、理系や医薬系学生のための ESP の授業で文学教材を使う先行研究もある (Hirvela, 1990; Kelly & Krishnan, 1995; 久世, 2019)。

実践者の声から教材の意義を検討するという研究方法については、Paran (2008) が指摘する当該分野の問題点、すなわち、理論を支える実証研究の遂行が急務であること、中でも、実際の教室で教師はどのような関心を持ちどんな実践をしているかを示す多くの事例が必要であることに応えるものである。これまで文学教材やそれを使う英語授業について、学習者の反応を分析する研究は多くなされてきたが、実践者の信念や姿勢に関心が持たれることは少なかったため、その点も本研究で進めたいと考えている。

### 3. 研究の対象と方法

本研究で対象とした実践は以下の 2 例である。

	教員 A の実践	教員 B の実践
対象学生	経営学部 2 年生	経済学部 (国際経済学専攻) 3 年生
コースの概要	「ビジネス英語 (Movie)」(選択必修) 映画を通し、ビジネス英語を中心とした英語力の向上を目指す (2018 年)	「ゼミ」(選択、英語教員が担当) リーダーシップについて学びながら英語力の向上をはかる (2018 年)
主教材	映画「The Remains of the Day」	リーダーシップに関連するテーマを持つ文学 8 作品
教員の専門/母語	応用言語学、ビジネス・コミュニケーション、英文学/日本語	応用言語学、認知言語学/英語

教員 A の実践は、*The Remains of the Day* の映画のみを教材とし、スクリプトの読解、言語や内容理解についての問題、ビジネス表現の学習、会話や手紙の創作などの言語活動を行った。教員 B の授業では、Harvard Business School (HBS) での実践を参考に、春学期 3、夏休み 1、秋学期 4 のペースで指定の小説や戯曲を読み進め、授業中は英語でのディスカッションを行った。教員が予め内容理解のための質問とディスカッション・トピックを用意し、進行役も学生が務めるようにした。教員 A, B 共に文学の専門ではない。

研究の方法は、まず、シラバス等の文書から各授業の内容や教材の使い方などの情報を収集して整理し、その上で 2 人の教員にそれぞれ約 2 時間の半構造化インタビューを行った。インタビュー後には録音から文字起こしをし、全文のスクリプトを作成して①実践の動機、②意義として感じたこと、③難しい点の各観点から結果を分析した。インタビューは、2020 年 1 月と 3 月に実施した。

#### 4. 実践とインタビューの分析（教員 A）

実践者は、ビジネス英語の授業で映画「The Remains of the Day」を用いた動機として、まず、「社会の中で明日からすぐに使えるものがもてはやされる時代だからこそ、大学生のうちにそうでないもの、深く考えさせられるようなものを教材として使いたかった」ことを挙げた。実際、この授業では登場人物の行動の理由やタイトルの持つ意味など作品の内容に踏み込んだ問題を扱い、受講生はそれらに対する自分の考えを持って意見交換をする。他の動機としては、この作品は主人公の執事としての仕事場を中心に描いているのでビジネス関連の場面が多いこと、原作の著者がノーベル文学賞を受賞し注目度が高まっていたことなどである。

実践を通して、教員は、教科書などで学んできた英語が教室の外に広がることを学生自身が感じ、英語学習への動機付けにつながった、現実の場面で英語が使われる authentic materials の持つ意味は大きいと指摘した。そして、このように様々な見方が可能である教材だからこそ、意見の分かれる質問に対してグループで議論しプレゼンテーションを行う project-based の活動ができること、CLIL (content and language integrated learning) のように言語や表現と共に内容を教えるアプローチが可能となること、反転授業もできることなど言語活動の観点から意義を強調した。その反面、実践の難しい点として、解釈や意見の分かれる問題に取り組むということに受講生は慣れていないので、様々な意見を整理しつつ英語の授業を進める必要があることを指摘した。

#### 5. 実践とインタビューの分析（教員 B）

対象とした実践は英語教員が担当する経済学部ゼミである。実践者は、英語能力の向上だけでなく学生の専攻やキャリアに関連した教育をする必要があり、かつ「人格教育」を重視する大学の教育目標に資する内容を扱いたいと考えていた。ネイティブ・スピーカーの教員の視点から、ESL/EFL (English as a second/foreign language) 学習者用の教科書はつまらないと感じており、fiction を教材とすれば受講生に自分の経験や考えを英語で話す機会を提供できると考えた。そこで、文学作品を通してリーダーシップの概念を学ぶ HBS のコースを自分の授業の環境に合うように修正して実践したのである。

*Death of a Salesman, Things Fall Apart, The Secret Sharer* などリーダーシップに関連する 8 つの文学作品を読む中で、「学生は経験が浅くても文学を読むと本の中に自分で入り込み、人の考えていることが理解できるようになる」と実感したという。そのためには、学生が empathy を得られるように自分と関係があると感じられる内容の教材を用いることが重要であると指摘した。また、実際に使う英語、real English は文学作品の中にこそあると再確認したそうである。ただし、本授業は比較的英語力の高い学生を対象としたものであったにもかかわらず、読解には時間がかかり、また、活発なディスカッションを促すには教員の助けが必要であった。スキミングなどの読解ストラテジーを教えたり、言語・内容理解のための問題を作ったりするなどの工夫を要した。

#### 6. 考察とまとめ

2 名の実践者が共通して強調していたのは、文学的教材こそが authentic materials であり、そこに現れる英語が real English であるという指摘である。文学的英語は実際には使えないと言われることがあるが、文学的教材は、受講生にとって関心のある ESP の授業で authentic な英語を学ぶ機会を提供することができると言える。

両実践共、受講生に内容を深く考えさせ、登場人物の感情を理解しながら英語学習を進めるという点が重要視されている。自分の解釈に基づき意見を持つことはグループ・プロジェクトやディスカッションを活性化させ、その結果、読解力だけでなくオーラル面も含めた英語力の向上につながることを期待できるが、その一方で、文体論の知見を活かした言語への気づきを促す活動にはそれほど注意が払われていないように思われる。

文学的教材は、どのようなコンテキストでも有効に使えるというものではないだろうが、実践者がその特質を活かし授業の目的に合うよう慎重に用いるならば、これまで考えられていたよりも幅広い多様なコンテキストで利用することが可能であると考えられる。

#### 参考文献

- Carter, R. & Long, M. (1991). *Teaching literature*. Harlow: Longman.
- Hirvela, A. (1990). ESP and literature: A reassessment. *English for Specific Purposes* 9: 237-252.
- Kelly, R. K. & Krishnan, L. A. (1995). "Fiction talk" in the ESP classroom. *English for Specific Purposes*. 14 (1): 77-86.
- 久世恭子 (2019). 『文学教材を用いた英語授業の事例研究』 東京. ひつじ書房.
- Paran, A. (2008). The role of literature in instructed foreign language learning and teaching: An evidence-based survey. *Language Teaching* 41 (4): 465-496.
- Widdowson, H. G. (1983). *Learning purpose and language use*. Oxford: Oxford University Press.